

北京からウィーンまで列車で旅する

吉澤 郁（青森戸山高校、1984年度卒）

1 はじめに……………なぜ列車の旅なのか？

2 旅の目的……………物見遊山。人の行かない国へ、人と違った方法で行く。

（1）シベリア鉄道を利用してユーラシア横断

（2）人類の負の遺産アウシュヴィッツ訪問

3 事前準備・情報収集

（1）インターネットでの情報収集

（2）地球の歩き方「シベリア&シベリア鉄道とサハリン」

「チェコ・ポーランド・スロバキア」

「ウィーンとオーストリア」

（3）Thomas Cook “EUROPEAN TIMETABLE”（時刻表）

（4）その他

4 旅行記……………東洋から西洋へのひたすら長い列車の旅

（1）訪問した街…北京、モスクワ、ワルシャワ、オシフィエンチム、クラクフ、プラハ、ウィーン

通過した国…中国、モンゴル、ロシア、ベラルーシ、ポーランド、チェコ、オーストリア

（2）旅先で出会った思い出に残っている人たち

5 旅の費用……………高いか安いかは考え方しだい

（1）何をどうやって節約するか

6 その他……………あまり役立たない？旅の技術

（1）言葉について

（2）両替について

（3）こんなものを食べていた

7 おわりに……………それぞれの旅行スタイルで旅を楽しむ

8 付録……………影響を受けた本

1 はじめに……………なぜ列車の旅なのか？

♪ この線路の向こうには何があるの？

雪に迷うトナカイの悲しい瞳 ♪

「さらばシベリア鉄道」(大滝詠一) より

大滝詠一の「さらばシベリア鉄道」がヒットしたのはもうふた昔も前になるだろうか(太田裕美も歌っていた)。シベリア鉄道に乗ってヨーロッパへ行ってみたいと考えるようになったのはその頃からだ。

一昨年、20年来抱き続けてきた思いをついに実行に移すことにした。単にシベリア鉄道に乗るだけではつまらないので、ついでにモスクワからさらに足を延ばし、ナチスのユダヤ人強制収容所があったポーランドのアウシュヴィッツ(ポーランド名オシフィエンチム)へも行く計画を立てた。そして、古い街並みを今も残しているチェコのプラハへ。その後は行き先も決めずに行き当たりばったり。西ヨーロッパのどこかの国で日本行きの安い航空チケットを買って帰国できればいい。こんないいかげんな予定でヨーロッパへ行こうとしていたのである。

「お客さん、度胸ありますねえ。きっと無事に帰って来てくださいよ…。」

今回の旅程を旅行社の方に相談しに行ったとき真っ先に言われた言葉である。たった一人でこんな酔狂な旅をする人はそれほど多くはないのだろう。通過するほとんどの国で英語が通じるかどうか定かではないのだ。(もっとも自分の英会話能力にも自信は全くない。) 出入国手続き、列車の切符の手配、移動、ホテルとの交渉等々を全て一人でやらなければならない。主要なところは日本の旅行社にもお願いするつもりでいたが、細かい部分は自分の責任でやってみてみたかった。自信はないけれども何とかなるだろう。紛争地帯へ一人で乗り込むわけではないのだから…そんな気持ちだった。



《モスクワ行きの三番列車》

7月31日、チェコのプラハまでの旅行計画しか立てていないまま東京行きの夜行列車に乗った。その後の予定は全く白紙状態で、帰国のための航空券すら購入していなかった。日本で買うより現地の方が安いと何かの本で読んだからだ。(しかし、これはちょっと無謀だったかもしれない。結果的にウィーンで格安の航空券を入手できたものの、旅行者の多い夏期は航空券は簡単には手に入らないと後で聞いた。私は運が良かった。)

8月14日、何とか無事帰青。中国の首都北京、モンゴルの砂漠と草原地帯、シベリアのタイガ(大針葉樹林帯)・バイカル湖、モスクワ、ポーランドの首都ワルシャワ、アウシュヴィッツ(オシフィエンチム)、古都クラクフ、チェコの首都プラハ、そしてオーストリアの首都ウィーン。二週間ちょっとという短い期間ではあったものの、全く異質な文化圏を一人で旅し、無事に帰ってくることができて本当に満足している。

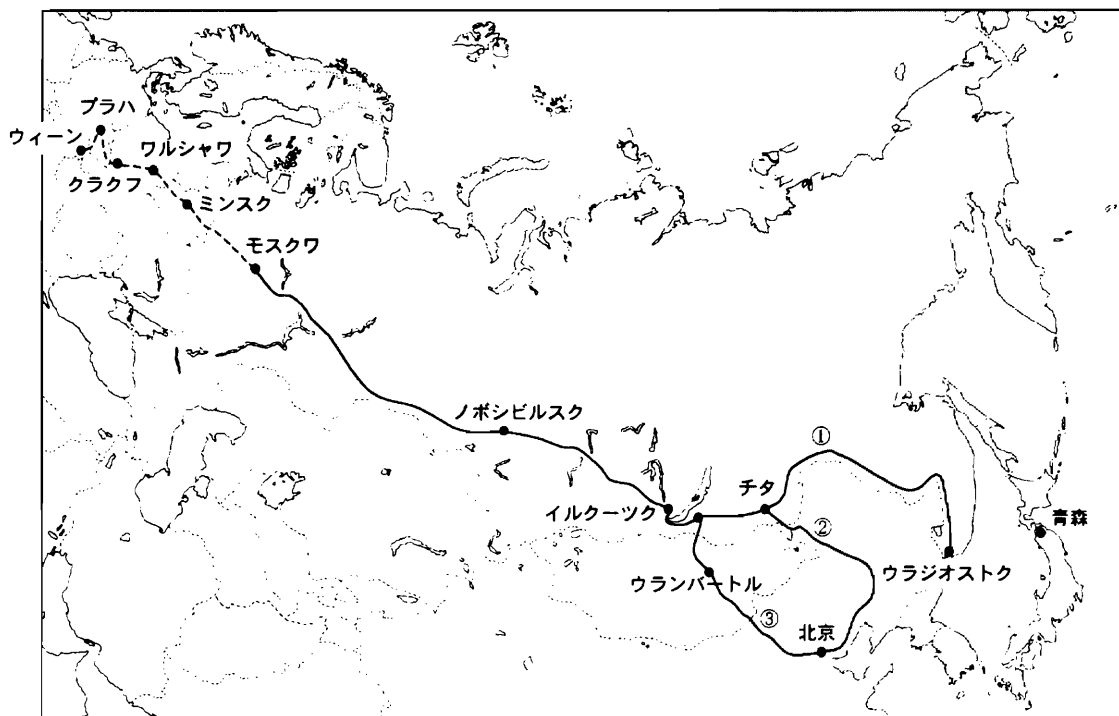
2 旅の目的……物見遊山。人の行かない国へ、人と違った方法で行く。

- (1)シベリア鉄道を利用してユーラシア横断
(2)“人類の負の遺産”アウシュヴィッツ訪問

今回の旅行の目的はたったの2つ。シベリア鉄道を利用してのユーラシア大陸横断と世界遺産にも登録されているアウシュヴィッツ強制収容所跡訪問のみ。中でも、シベリア鉄道を走る列車に一週間近く“ただひたすら乗る”ことが最も大きな目的だった。何かの研修だったわけじゃないし、もっともらしい高尚な目標があったわけでもない。

シベリア鉄道を利用してモスクワまで行くには3つのルートがある。一つはウラジオストックからすべてシベリア鉄道を利用して行く方法（図中①）。もう一つは北京から満州里を経由してロシアに入り、シベリア鉄道を利用する方法（図中②）。3つ目は北京からモンゴルの首都ウランバートルを経由してロシアに入国し、バイカル湖近くのウランウデでシベリア鉄道に入る方法（図中③）。今回の旅行では、（査証[ビザ]の代金などがよけいにかかるが）車窓からの風景を楽しめる第3番目の方法をとることにした。

今は誰でも気軽に海外旅行へ行けるようになってきている。大勢の人たちが行く国やリゾート地へ団体ツアーで行くのはあまり興味がなかった。人のそれほど行かない国を人と違った方法で旅し、自由に一人で歩き回りたい…先の見えない不安、危険は承知しながらも、どこまで楽観的になれるか試してみたかったのである。



3 事前準備・情報収集

(1) インターネットでの情報収集

<http://www.arukikata.co.jp/index.html>…「地球の歩き方」のHP

<http://www.jic-web.co.jp/rus.htm>…「JIC旅行センター」のHP

上記の他にもシベリア鉄道を扱っている旅行社のHPが2年前（2000年）にはいくつかあったのだが、確認のため今年（2002年）アクセスしてみたところ無くなっていた。会社自体が無くなってしまったのだろうか？

(2) 地球の歩き方「シベリア&シベリア鉄道とサハリン」

「チェコ・ポーランド・スロバキア」

「ウィーンとオーストリア」

黄色い表紙に青い縁、海外旅行の定番。「不正確な情報もあるのでよくない」とケチをつける人も中にはいるが、私は大いに参考した。しかし、何冊もの本を持参するのは重いし、ムダな箇所も多いので必要な箇所だけコピーをとり大学ノートに貼り、自分だけのガイドブックを作って持っていった。

「地球の歩き方」はその独特の装丁のため非常に目立つ。日本人の旅行者の多くが持っているので、その本を持ったまま街をウロウロしていると犯罪のターゲットになりやすいと何かで読んだ記憶がある。

(3) Thomas Cook “EUROPEAN TIMETABLE”

多分、世界で最も有名な列車時刻表である。Thomas Cook 社が出している。青森市新町の成田本店でも購入できる（2,000円程度だった）。ヨーロッパの街の名前、位置がある程度わかれば誰にでもわかるし（基本的に街の名前と発車や到着の時刻だけなのだから）、実際にとても重宝した。これを見ながら緻密な？タイムスケジュールを組んだのである。（当然ながら計画倒れもかなりあったが…）これも、前述（2）の大学ノートの最後の方に必要な箇所をコピーして貼った。

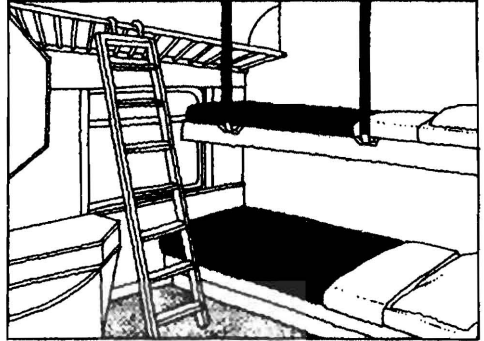
(4) その他

旅行の具体的な内容は青森市内にあるT観光へ行って相談した。いろいろ心配されたが、結果的に最も確実で、信頼できるアドバイスをもらえたような気がする。日本国内の交通機関と北京までの飛行機、ワルシャワまでの列車、ホテルの手配、ビザの申請はこの旅行社にお願いしている。（インターネットで探せばもっと安い方法が見つかったかも知れないが、信頼できるかどうかかわからないのだ。だまされるのでは？と気に病むぐらいであれば、直接会って話ができる地元の旅行社の方がましだと考えたのである。）

4 旅行記……東洋から西洋へのひたすら長い列車の旅

(1) 通過した国…中国、モンゴル、ロシア、ベラルーシ、ポーランド、チェコ、オーストリア
訪問した街…北京、モスクワ、ワルシャワ、オシフィエンチム、クラクフ、プラハ、ウィーン

8月2日午前7時40分。定刻通りにモスクワ行きの3番列車は北京駅から発車した。ソフトクラスのコンパートメント（個室）は、片側が上下二段のベッドで、もう一方はイスと洗面所という間取りだった。初日こそスイス人の旅行者と同室になったが、その後彼がモンゴルの首都ウランバートルで翌日下車してしまうと、そこから先はずっと一人で部屋を占拠できた。洗面所は隣室と共同使用で、双方の部屋からの出入りができる。多少無理すれば洗髪も可能。旅行中はそこで洗濯までして、誰に気兼ねすることもなく部屋に干していた。また、このクラスの車両には絨毯が敷いてあり、内装は日本の普通の寝台車よりもかなり豪華である。さらに、トイレも常に清潔に保たれている（車掌さんがこまめに掃除していた）。全体的にみると今回の列車の旅は旅行前に想像していたよりもはるかに快適であったと思う。



《コンパートメント（イメージ）》



《モンゴルの地平線》

北京からモスクワまでの全行程5泊6日のうち中国とモンゴルは2日で通り過ぎてしまった。それでもモンゴルの風景は最も印象に残っている一つである。中国からモンゴルにかけては砂漠、首都のウランバートル付近からは地平線のかなたまで続く草原、日本では絶対に見ることができない景色に感動した。

モンゴルの北部からシベリアにかけては針葉樹の森（タイガ）が広がっていた。しかし、シベリア鉄道の沿線は（部分的ではあるものの）意外なほど拓けていて、小さな村や町、牧草地や畑も見られる。車窓からの景色は単調で、すぐに飽きてしまった。数時間毎に停車する大きな街を除けば、ひたすら針葉樹の中を走っているだけだったのだから。



《シベリアの針葉樹林帯を行く》

「そんなにも長時間列車に乗っていてよく退屈しなかったね。」

と呆れられたが、それは間違いである。実際は死ぬほど退屈していた。日本から持っていった5冊の本を読み（すべて読み終えた）、洗面台で洗濯をし、洗髪をし…それでも時間はゆっくりと過ぎていった。眠くなった時に横たわり、お腹が空いたときに食べる。駅に停まればちょっとだけ降りて背伸びし、また戻る。気が向いた時にイスに座って外をただボーッと眺める。このような日がおよそ4日も続いたのである。

8月7日午後2時30分頃、終点のモスクワのヤロスラブリ駅には到着予定時刻より二時間も早く着いて、長いシベリア鉄道の旅を終えた。

全体的に退屈でのんびりしていた列車の旅で最も緊張したのは国境を越える際の出入国手続きである。中国からモンゴル、モンゴルからロシア、飛行機で空港に到着した時に比べるとより念入りに調べられ、不審者を見るような目で睨まれる（ように私には感じられた）。列車は密輸や密入国に利用されやすいから仕方がないのであろうが、あまりよい気持ちはしない。

モスクワに一泊し、翌日午後3時50分の列車でワルシャワへ向かった。シベリア鉄道の発着駅とワルシャワ方面への発着駅は少し離れている。今回の旅を相談した旅行社の方が一番心配していたのがこの点である。英語が通じないかも知れないモスクワで駅を探し出し、乗るべき列車に



《モスクワ・ベラルーシ駅（ポーランドなど西側方面への列車が発着する）》

乗車できるだろうか…自分でもとても不安だった。しかし実際に駅へ行ってみると、行き先や時刻は電光掲示板に示されているし、駅自体も迷うほど大きくはない。心配は杞憂だった。ロシアからの出国手続きは、なぜかベラルーシで行っている。旧ソ連の一員だからだろうか今でもつながりは深いようである。途中列車の台車交換のため2時間ほど停車した。(旧ソ連の線路は広軌)

8月9日午前9時、ワルシャワ中央駅に到着。宿泊予定のホテルに荷物を預け旧市街を歩いて散策した。旧市街はそれほど広くはなく、半日ぐらいで歩ける。ショパン博物館などに立ち寄りながら旧市街市場広場まで行った。翌日は早朝に出発してポーランド南部のオシフィエンチム

(アウシュヴィッツ)へ向かう予定なので、帰る途中で中央駅に寄り、あらかじめ切符を購入しておいた。切符は窓口で買うのだがポーランド語ができなくても大丈夫。日本から持参した小さなノートに行き先、列車の番号、出発日時を書いて(アルファベットと数字ぐらいなら誰にでも書ける)見せればきちんと理解してもらえる。

国内線の切符売り場の窓口では英語は通じないだろうとガイドブックにあった。英語ができても、できなくても同じなのである。

8月10日、急行で到着したカトヴィツェでローカル線に乗り換えオシフィエンチムまで向かう。そこは特に目立つもののない田舎町だった。青森で言うところの野辺地駅や川部駅といった雰囲気である。アウシュヴィッツ強制収容所はそこから2km弱離れている。行きはタクシーを使い、帰りは歩いた。



《アウシュヴィッツ強制収容所》



《ARBIT MACHT FERI と書かれた門》
(働けば自由になる)

アウシュヴィッツにはヨーロッパ各地から多くの自動車 coming 来ているらしかった。駐車場に停まっている自動車のナンバープレートには各国の国旗もプリントされている。それを見ればいかに多くの国から自動車がやってきているかわかるのだ。一方、アジア系の人は

数人しか見かけなかった。

見学後、列車で古都クラクフに移動し宿泊。やはり翌日の切符を駅であらかじめ購入しておいた。

8月11日、午前中クラクフの旧市街を散策し、昼頃列車でプラハへ向かった。途中チェコのオストラヴァで下車した。そこでチェコの通過に両替し、さらにプラハ行きの切符を購入しなければならな

かった。しかも待ち合わせの時間は20分間しかない。列車に乗り遅れるとプラハ到着が夜中になってしまう。今回の旅で最大の難関であった。ぐずぐずしてられないのはわかっているので自分からどんどん道を尋ね、話しかけ、お願いした。その積極性にわれながら驚いている。



《クラクフの中央市場広場》



《プラハ中央駅》

8月12日、やはり午前中プラハの旧市街を散策し、午後にはウィーン行きの列車に乗った。プラハの古い街並みをもう少し歩きたかったのだが、帰りの航空チケットの関係でもう一泊は無理だったのである。午後3時にウィーン南駅に着いた。

8月13日、ウィーン・シュベシャート国際空港12時50分発の飛行機で帰国の途についた。13日間かかったコースをたったの13時間かけて日本へ戻ってきた。



《ウィーンの旧市街》

(2) 旅先で出会った思い出に残っている人たち

○北京からの列車の食堂車で相席した日本人大学生

一人で食堂車で夕食を食べていたら、後で来て相席になった2人が日本語で話をしだした。自分も日本人である旨を伝え話に加わった。どちらも一人旅で偶然同じコンパートメントになったとのこと。彼らは4人乗りの軟臥車に乗っており、2人用の高級軟臥車に乗っている私とは車両が違っていた。一人はイルクーツクまで、一人はモスクワまでだという。モスクワまで行く学生はお菓子などの食料をどっさり買い込んで乗車していた。ロシア人と同室になれば友達になりたいのだそうである。確か誰かの旅行記で似たような話を読んだ。旅行記ではロシア人との国際交流がうまくできたと書いてあったが…イルクーツクを過ぎてから彼の車両に行ってみると、4人用のコンパートメントに彼一人だけが退屈そうに窓の外を見て座っていた。同室者は乗ってこなかったらしい。

○北京からモスクワまでの列車の車掌さん

最初はお互い挨拶をかわす程度だったが、だんだん親しくなり、片言の英語で会話をするようになった。車掌室でお茶を飲ませてもらったり、中国の“元”をロシアの“ルーブル”に両替してもらったり、何かとお世話にもなった。モスクワに着く最終日に車掌さんのうちの一人が一冊の冊子を持ってきて何か書いてくれと言う。中を見ると、これまでにその列車に乗った人たちの感想や感謝の言葉が英語や中国語、ロシア語、ドイツ語など様々な国の言葉で書いてある。乗車記念に乗客の何人かに書いてもらっているのだろう。その一人に私が選ばれたことを嬉しく思い、日本語でお礼を書いておいた。

○モスクワのインツーリストホテルの売店の女性店員

英語が通じないかもと心配して入った売店の女性店員の第一声が「こんにちは。いらっしゃいませ」で驚いた。愛想も良い。英語は不自由なく話していた。

翌日のワルシャワ行きの駅で、どのプラットホームの列車に乗ればいいのかロシア語で駅員に聞かなければならない羽目になるといけないので、その文章を英語で提示し彼女にロシア語に訳してもらった。もちろんタダではない。店で最も安い（しかし一番素朴な感じがする）マトリョーシカを買い、代金を払った後でお願いしたのである。この時は面倒くさそうに応じてくれた。

外国語を話せることは商売の成功やお金儲けに直結してくる。このためどこの国でもお土産やさんは英語（や日本語）を話せる人が多いと思う。

○ワルシャワ行きの列車で同室になりそうになった初老の女性

モスクワ発ワルシャワ行きの（寝台）列車は3人用のコンパートメントだった。その個室にいて一人で発車を待っていると、初老の女性が乗り込んできた。英語が話せる人で、ポーランド人だという。発車してからしばらく英語で世間話をした。「あなたは英語が上手いねえ」な

どとお世辞まで言われてしまった。ベッドは、私が下段で彼女は上段だった。替わってやろうかと思っていたら、彼女は車掌さんと交渉して隣の誰もいないコンパートメントに移っていった。ホッとした。その頃私の英会話能力は限界にきていたのである。

○ワルシャワ中央駅の地下のマクドナルドで話しかけてきた日本人のおじさん

早朝6時頃、ワルシャワ中央駅のマクドナルドで朝食を食べていたら、日本語で話しかけられた。年齢は50歳代ぐらいの日本人で、たった今ラトビア（バルト3国の一つ）から着いたばかりだという。彼はユースホステルなどに泊まりながらもう2ヶ月も東欧を旅しているとのこと（若者でなくてもユースホステルは宿泊できる！）。痩せていてひげをたくわえており、仙人のような雰囲気の人だった。少しだけ世間話をして別れた。

不思議な人が世の中にはいるものである。

○クラクフからオストラヴァ行きの急行列車で会った日本人大学生

クラクフからオストラヴァ行きの急行列車に乗っていたら、酔っぱらいのおじさんが「トウキョー」などと言いながら話しかけてきた。かかわりあいになりたくなかったのであいまいな返事をしていると別のコンパートメントから一人の日本人大学生を連れてきた。向こうも何のことかわからず手を引かれて来たら私がいたということらしい。おじさんはすぐいなくなってしまったが、我々は少し雑談をした。彼は、ワルシャワ現地集合の国際ボランティアに参加すると言っていた。交通費はもちろん自前である。私と逆にウィーンに飛行機で着き、列車でポーランドに移動している途中なのだそうだ。集合日にはまだ日にちがあるのでアウシュヴィッツに寄っていくつもりとのこと。私は前日アウシュヴィッツに行っていたのでいろいろアドバイスしてあげた。

○クラクフからオストラヴァ行きの急行列車で同じコンパートメントにいた女性

前述の大学生がどこかの駅で降りてしまうと、同じコンパートメントにいた30歳ぐらいの女性が話しかけてきた。食べていたお菓子もどうぞという。ガイドブックなどではこの手の人には注意しなければならないと書いてある。一瞬それが頭をよぎったが、その女性は2歳ぐらいの女の子と一緒にのだ。おそらく親子だろう。そんな人が悪事を考えているとは思えず、ありがたくお菓子をいただき、少し会話をした。ドイツ語で話しかけてきたのでドイツ人かと思ったら、ポーランド人であった。英語は全くダメだという。ポーランドでは英語より色々な面で影響力のある隣国ドイツの言葉の方が重要なかもしれないと感じた。こちらは英語はもとよりドイツ語など話せないなので、持参したドイツ語会話集を使い、例文を指で示しながらお互いの意志疎通をはかった。

海外を観光で旅行していると商売をしている人を除けば現地の人と話をする機会はほとんどない。そんな中で、この経験はとても貴重だった。一番の嬉しい思い出といっても言い過ぎではない。

5 旅の費用……高いか安いかは考え方しだい

種 別	金額 (円)	摘 要
J R 運賃	19,640	青森～上野 (夜行列車)
スカイライナー	1,920	京成上野～成田第2ターミナル
航空運賃	66,000	成田～北京
宿泊料金 (北京)	10,000	天僑飯店
列車料金	48,000	北京～モスクワ (ヤロスラブリ駅)
宿泊料金 (モスクワ)	9,000	インツォーリストホテル
列車料金	22,000	モスクワ (ベラルーシ駅) ～ワルシャワ
宿泊料金 (ワルシャワ)	12,700	ジャンⅢソビエスキホテル
宿泊料金 (クラクフ)	13,300	コンチネンタルホテル
宿泊料金 (プラハ)	8,500	イビスホテル
航空運賃	100,000	ウィーン～成田
リムジンバス	3,000	成田空港～羽田空港
航空運賃	28,000	羽田空港～青森空港
手配通信費	8,000	
査証代	18,000	中国・モンゴル・ロシア
査証手続費用	16,800	
計	384,860	

※上記の他にかった費用

- ワルシャワ～オシフィエンチムまでの列車料金、
 - オシフィエンチム～クラクフまでの列車料金、
 - クラクフ～プラハまでの列車料金、
 - プラハ～ウィーンまでの列車料金、
 - 市内交通費
 - 博物館・美術館等への入場料
 - 飲食費
 - 土産代
- } 合計で3万円程度

(1) 何をどうやって節約するか

- ①青森～成田間の交通費＝“夜行バス”という手もあるが…体の疲れのことを考えて止めた。
(多少高額だが、体力を温存するには往復とも飛行機が一番)

②**宿泊費（ホテル代）**＝大きく節約することも可能。（しかし、西側諸国ならともかく旧社会主義国の事情はよくわからないので旅行社にお願いすることにした。）

《 実際に行ってみて判ったこと 》

- 中国：日本で予約していった方が無難。
- ロシア：絶対に日本で予約していく必要あり。（宿泊先が決まっていなくてビザがない）
- ポーランド：現地に着いてから探しても大丈夫。ユースホステルに泊まれば
- チェコ：現地に着いてから探しても大丈夫。一泊2,000円代も可能
- オーストリア：基本的に日本と同じ。高いところから安いところまで自由に選べる。

③**査証代・査証手続代**＝査証（ビザ）の料金は国によって決まっているので節約など不可能。
ただし、査証の取得は自分で行えばお金を大幅に節約できる。（私は面倒なので旅行社にお願いした。）

《 それぞれの国での査証必要の有無 》

- 中国：必要。観光ビザ\3,000
 - モンゴル：必要。通過ビザ\3,500
 - ロシア：必要。観光ビザ\5,000
 - ポーランド・チェコ・オーストリア：不要。
- ※ 2000年8月時点の金額

④**航空運賃**＝時期・航空会社・トランジット（乗り換え）の有無等によって金額は大きく違ってくる。

- 8月の夏休みの時期は高額。7月の中旬まではやや安い。
- 先進国の航空会社は一般に高額。途上国の航空会社の運賃には非常に安いものもある。
- 直行便は高額。途中で乗り換えがある便は安い、時間がかかりすぎるのが難点。
- 格安チケットを使えば安い。ただし、搭乗の変更が不可などデメリットもあるので注意が必要。

⑤**列車運賃**＝旅行雑誌やガイドブックなどで研究して切符を購入すればかなり安くおさめることもできる。日本で旅行社を通して購入するよりも、現地で並んで買った方が安いはず。（旅行社を通すと手数料がかかるので高いのは当然。なお、西ヨーロッパならばユーレイルパスという手もある。パスの購入は日本で行うこと。）

※北京～モスクワ7,865kmの料金は、私がお願いした旅行社だと\48,000だったが、インターネットで調べた某社の代金は\82,000（含：北京でのホテル1泊代）だった。多分、北京の駅か旅行代理店で購入するともっと安い可能性がある。

⑥**市内交通費**＝バスや電車などの公共交通機関の利用が絶対お得。少々遠くても歩いて回る根性があればなおよい。タクシーは高くふっかけられるおそれがあるので注意が必要。特に日本との経済格差が大きい国は要注意！

6 その他……あまり役立たない？旅の技術

(1) 言葉について

やはり英語は多少できた方がよい。しかし、流暢に話す会話力が絶対に必要だというわけではないと感じた。中学生で習った程度の会話力（とわずかの度胸）があれば一人旅は可能だと思う。実際、中学1年生程度の英会話能力しかない私でも旅行して帰ってきている。

○北京：空港で駅行きのバス停の場所を英語で聞いたらきちんと教えてくれた。私の宿泊したホテルのフロントでは日本語すらOKだった。ただし、タクシーの運転手や駅員さんは（私の狭い経験では）英語は通じなかった。なお、中国では漢字での“筆談”がほんのわずかだができるのが特筆すべき点である。

○列車の車掌さん：私の車両の車掌さんは皆不自由なく英語が話せた。多分こちらの英会話能力より何倍も上だと思う。挨拶や、列車の進行状況、その他の雑談は英語で行った。

○モンゴルとロシアの入国係官：私の経験した範囲では英語はほとんどダメ。夜中にコンパートメントのドアをドンドンと荒々しくノックされて開けたところ、現地の言葉らしい言語で何やらまくし立てられた。パスポートを取り上げられ、1時間ほど返却されず、しかもその理由をまったく告げられずとても心細かったのを覚えている。

○モスクワ：シベリア鉄道の終点駅のヤロスラブリ駅から赤の広場近くのホテルまで地下鉄で行く際、若い男性に英語で尋ねたら教えてくれた。人物を見定めて、思い切って声をかけるのがコツである。（若く、かつ聡明そうな人を選んだのがよかったらしい。）ホテルでは、フロント、お土産店ともに英語が通じた。お土産店の女性店員は片言の日本語もできた。ちなみに、タクシーの運転手も赤の広場にいた露天商もわずかだが英語を話していた。外国の観光客を相手にしている人たちは、外国語（特に英語）の会話能力が収入に直結しているためか英語を解する人が多いように思う。

○ワルシャワ：モスクワ同様、私が宿泊したホテルのフロントやお土産店では英語が通じた。ただし、一般の人にどれだけ英語が通じるかははっきりしない。（いろいろな意味で）隣国のドイツの存在が大きいため、英語よりドイツ語の方が通じるのではないかと考えられる。駅の表示等はドイツ語でも併記されており、ドイツ人の旅行者らしい若者がたくさんいた。

○プラチスラバ：駅で両替し、プラハまでの切符を購入した。記憶は定かではないが、両替所は郵便局と併設しており、英語は通じた。プラハ行きの列車はどれかプラットホームにいる列車を待っている若い女性に英語で尋ねたところ、これまた親切に教えてくれた。

○プラハ：会話をしたのは、ホテルのフロント、駅の切符売り場や商店の人及びタクシーの運転手だけ。私の拙い英語でも通じた。

○ウィーン：西側諸国なので英語は当然通じる。ホテルのフロントで“Could you call me a taxi?”とお願いしたところ、“Sure!”と笑顔で応じてくれた。

《 これだけは覚えて欲しい言葉 》

ワルシャワの歴史博物館に入った際、窓口の中年の女性から「こんにちは」と日本語で挨拶された。私を日本人と見て、日本語で話しかけたのだろう。たったそれだけのことがとても嬉しく感じられ、こちらもすぐに「こんにちは」と笑顔で返した。日本から遠く離れた異国で日本語を聞いて驚いた思い出である。

外国へ行く場合、何語であれ「はい」「いいえ」と「ありがとう」「こんにちは」くらいはその国の言葉で言えるようにしたいもの。また「もっと安くして」と言うことができれば買い物の際に役立つ。これらの言い回しはガイドブックにたいてい載っているのでぜひ覚えて行った方がよい。

旅先の現地の言葉を完璧に話せるようになるのはきわめて難しい。しかし基本的な単語などは英語ではなく現地で話されている言葉の方が相手に対して良い印象を与えらると思う。(たとえそれが下手な発音であっても！)

(2) 両替について

○どこで両替するのが一番有利なのか気になるところ。しかし、事情の知らない行っただけの外国で胡散臭い人に両替してもらうと落とし穴にはまる危険性がある。レートが多少よくてもうまい話には乗らない方が無難。私は、着いてすぐに駅の中の両替所でまず1万円程度両替し、必要に応じて街の銀行で追加した。東欧諸国はそれほど物価も高くはなかった。チップのために小銭も用意しておいた方がよい。



[中国・元]



[モンゴル・トゥグリク]



[ロシア・ルーブル]

[チェコ・コルナ]



[ポーランド・ズォティ]



(3) こんなものを食べていた

○その土地の名物や高級料理などは一切食べていない。ホテルの朝食は別として、駅のキヨスクやスーパーマーケット、現地の人が行くような普通の商店で売っているものを買って食べた。ファストフード店（今は東欧諸国にもたくさんある）も時々利用した。

飲み物はビール中心。昼でものどが渇くとビールを飲んだ。安いしうまい。歩き回るときは売店で買ったミネラルウォーターのペットボトルも持っていった。自動販売機はほとんど見なかった。

7 おわりに……それぞれの旅行スタイルで旅を楽しむ

旅の形態は現在非常に多様化している。全て旅行社や添乗員にまかせる従来の海外旅行（いわゆるツアー：団体旅行）は楽でいい。しかし、個人で、そして自由に動き回るタイプの旅行も今は可能な時代なのだ。多少のリスクは当然覚悟しておくべき。その分無事帰ってきた成成感成はまた格別である。今回の旅行では一人旅の日本人と何度か出会った。車中や駅、ファーストフード店…数は多くないけれども、皆旅を自分なりに楽しんでいるように見えた。

学生時代は様々な旅の経験を積む格好の時期だと思う。暇ならたくさんあるはず。もっともらしい理由はいらない。物見遊山でもいいではないか。アルバイトでお金をためて、できるだけ安い金額で、そして人に頼らず何でも自分でやってみる、そんな旅を若い人たちに勧める。

歳をとると若者のやるような旅は難しくなってくる。それでも、私は好奇心だけは持ち続けていきたいと思っている。

8 付録……影響を受けた本

『シベリア鉄道9400キロ』

新潮文庫：宮脇俊三

昭和60年10月が初版。かなり前の本である。

学生時代に読んだ一冊。これを読んでシベリア鉄道に乗ってみたいと思うようになったのか、その逆かもう忘れてしまった。

（ウラジオストックは当時外国人が入ることが許されておらずナホトカから列車に乗ったと書いてある。）

『深夜特急』 新潮社：沢木耕太郎

人のためにもならず、学問の進歩に役立つわけでもなく、真実をきわめることもなく、記録を作るためのものでもなく、まるで何の意味もなく、誰にでも可能で、しかし、およそ酔狂な奴でなくてはしそうなことを、やりたかったのだ。

香港から乗り合いバスでロンドンまで行った作家沢木耕太郎氏のノンフィクション。私が学生時代に出版され（全4巻・文庫本では全6巻）熱心に読んだ。

『アジアのディープな歩き方 上・下』 旅行人：堀田あきお

“旅行人”という出版社から出されているマンガ。20代の若者が東南アジア諸国を旅して回る物語。もちろんフィクションだろうが、自由気ままな一人旅の楽しさと、危険、困難から切り抜ける力、といったものが書かれていて楽しめた。

『グレートジャーニー・人類5万キロの旅』

小峰書店：関野吉晴

グレートジャーニーとは、五百万年前に東アフリカで誕生した人類が、アジア、北アメリカを経由して南アメリカの南端にたどりつくまでの5万キロの旅のことです。この人類の旅を、徒歩、カヤック、自転車という、自分の足と腕の力だけでたどりはじめた日本人探検家があります。

私にはこのような旅行ができそうもない。しかし、世の中にはものすごい人があるものだ、と感銘を受けた。今の自分にできる範囲で、人のあまり行かないところへ旅行してみようと思い立たせるきっかけになった本である。

『小心者の海外一人旅～僕のヨーロッパ放浪日記』

P H P 文庫：越智幸生

外国語がろくに話せないのに外国を一人旅できるのか？シベリア鉄道の旅に本気で行こうかどうか迷っていた時に会った本がこれ。小心で英語がほとんどできない32歳の男性が西ヨーロッパ諸国を約1ヶ月かけて回った記録（ノンフィクション）である。この本を読んで大いに勇気づけられた。1日で読み終え、そのすぐ後、旅行に向けて具体的に動き出した。